

厚生労働科学研究費補助金(エイズ対策研究事業)

地域において HIV陽性者等の メンタルヘルスを 支援する研究

平成24年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 樽井 正義

地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究
平成24年度 総括・分担研究報告書

I 総括研究年度終了報告書

- 地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 …… 1
(H24 - エイズ - 一般 - 013)
研究代表者：樽井 正義

II 分担研究報告

- (1) HIV及び精神保健の専門機関における支援と連携に関する研究 …… 7
研究分担者：大木 幸子
- (2) 地域相談機関におけるHIV陽性者、薬物使用者へのサービス提供に関する調査 …… 37
研究分担者：生島 嗣
- (3) HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究 …… 59
研究分担者：若林 チヒロ
- (4) 薬物使用者を対象にした聞き取り調査 …… 63
—HIVと薬物依存との関連要因をさぐる—
研究分担者：生島 嗣
- (5) NGO等における支援の研究 …… 71
—陽性者支援NGOと薬物使用の問題—
研究代表者：樽井 正義

総括研究年度終了報告書

地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 (H24-エイズ-一般-013)

研究代表者：樽井 正義（特定非営利活動法人ふれいす東京／慶應義塾大学文学部）

研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人ふれいす東京）

大木 幸子（杏林大学保健学部看護学科）

肥田 明日香（医療法人社団アパリ・クリニック上野）

若林 チヒロ（埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科）

研究要旨

目的：本研究は、HIV感染症と薬物使用を含むメンタルヘルスに関して、その現状と課題を明らかにし、必要とされる対応を検討することにより、HIV陽性者と薬物使用者を支援するための基礎資料を策定することを目的とする。

方法：本研究は6つの課題から構成される。

- HIVおよび精神保健専門機関における支援と連携に関する研究（大木）
- 地域相談機関におけるHIV陽性者、薬物使用者へのサービス提供に関する研究（生島）
- HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究（若林）
- 薬物使用者を対象にした聞き取り調査－HIVと薬物依存との関連要因をさぐる（生島）
- 依存症治療施設におけるHIV陽性者診療の状況調査（肥田）
- NGOにおけるHIV陽性者および薬物使用者の支援に関する調査（樽井）

結果：エイズ診療拠点病院の医療者のおよそ半数が、患者のなかに薬物使用の経験者がいることに気づいており、4割が薬物使用に関わる相談を受けている。しかしほとんどの医療者が、こうした相談への対応に困難を覚えているが、それは地域の各種相談機関の担当者にとっても同様である。薬物使用に関する情報、依存回復を支える医療機関やNGOの情報が求められている。

男性同性愛者／MSMの多くは、偏見と排除という薬物使用を含むメンタルな問題の契機となりうる経験をもつこと、また異性愛男性と異なり、薬物使用と性的関係とが重なり合っていることが認められた。そして、薬物使用をHIV感染と結びつけているのは、静脈注射による薬物使用よりも、性関係における薬物使用によって予防が疎かにされるという事態であることがうかがわれた。

薬物使用／依存は、メンタルヘルスの課題の一つであり、健康問題として対処することが、陽性者支援にとって、さらにはHIV対策ならびに薬物対策にとっても、不可欠な課題であることが確認された。

A 研究目的

本研究は、HIV感染症と薬物使用を含むメンタルヘルスについて、その相互関連の現状を背景とともに明らかにし、求められる対応を検討することにより、HIV陽性者と薬物使用者の生活を支援するための基礎資料を、HIV医療領域および精神保健福祉領域の専門機関、地域の相談機関、陽性者支援NGO、薬物依存回復支援施設（当事者グループ）、HIV陽性者および薬物使用者自身とそのパートナーや家族、そして行政諸機関に提供し、もってHIVと薬物使用の予防と治療に資することを、研究全体の目的とする。

我が国では、薬物の静脈注射によるHIV感染の件数は、先進諸国やアジア近隣諸国と比べて、きわめて少数にとどまっているが、ここ数年、HIV感染症と薬物使用との関連を示す事例が、エイズ拠点病院、陽性者支援NGO、依存回復支援施設等から少なからず報告されている。これを受けて、2012年に改正されたエイズ予防指針では、「薬物乱用者」が、HIV感染の予防と治療において固有の対策を必要とする個別施策層の一つとして明記されることとなった。

これまでのエイズ対策研究において、薬物使用との関連を対象とする研究としては、地道に継続されてきた疫学研究や諸外国の動向調査がある。しかし、HIV陽性者支援についての研究としては、研究代表者等による個別施策層に関する研究（2002～04）における、薬物使用を含むメンタルヘルスに関する分担研究が挙げられるにとどまる。HIVに関わる医療機関やNGOでは、薬物使用に関する情報と理解が求められており、また薬物使用に関わる精神保健福祉機関やNGOには、HIV感染症とHIV陽性者に関する知識が十分にあるとは言えない。この不足が補われ、HIV陽性者と薬物使用者に対する適切な支援が提供される必要がある。

本研究の研究分担者は、一方では、HIV陽性者が直面する課題と社会の支援資源、さらには

課題の背景をなす職場や地域社会における疾病理解促進についての研究に従事してきた。また他方では、エイズ拠点病院や保健所等の全国の精神保健機関、首都圏における各種相談機関を網羅する支援の現状と問題点に関する調査を、多年にわたり行ってきた。この調査研究を継続しつつ、これまでの知見を踏まえて、HIV陽性者のメンタルヘルスおよび社会生活と、これを支援する医療機関、地域相談機関等の対応の、現状と課題を明らかにすることを、本年度の研究の目的とした。

B 研究方法

HIV陽性者にとっての薬物使用を含むメンタルヘルスの問題、陽性者の療養と社会生活を支援する医療機関、地域相談機関、NGOの対応、その現状と課題を明らかにすることを目的とする本研究は、(1) HIV医療領域および精神保健福祉領域の専門機関の医療者、(2) 地域の相談機関の担当者、(3) 陽性者支援および薬物依存回復支援NGOの担当者、(4) そしてHIV陽性者、これら4グループを調査対象とし、質問紙と面接による調査を行う。3年計画の1年目である本年度は、(1)と(2)に対してアンケート調査(a、b)を、(3)と(4)に対してはインタビュー調査(d、f)を実施した。また(4)に対して次年度に実施する調査(c、e)の準備を行った。

a. 専門医療機関に関しては、全国の保健所および政令指定都市・特別区の保健センターのエイズ対策担当者と精神保健相談の担当者各1名（合計1,506名、調査1）、全国のエイズ治療ブロック拠点病院・中核拠点病院と、東京都内の拠点病院のHIV診療に携わる看護師および医療相談室担当者の各1名（合計160名、調査2）、これらを対象に2つの郵送調査法による自記式質問紙調査を実施した。このうち調査2の回収

部数は97（回収率60.6%）であり、本年はその結果の分析を行った。調査項目は、精神保健の課題をもつ陽性者への対応の準備状況、対応経験の有無、問題点等とした。

b. 相談機関に関しては、東京都（1,033ヶ所）および大阪府（810ヶ所）の福祉事務所、就労支援相談窓口等に対して、郵送調査法による自記式質問紙調査を実施した。回収部数は全体で750（東京都423、大阪府327）、回収率は40.7%だった。調査項目は、事業および相談業務の概要、陽性者からの相談の有無と内容、対応上の課題等とした。

c. 陽性者への質問紙調査は、エイズ治療ブロック拠点病院および中核拠点病院に通院している約2,500名を対象とする。調査項目は、10年前と5年前に行った社会生活全般の調査を踏襲するとともに、新たに薬物使用を含むメンタルヘルスに関する質問を追加する。本年は、この調査項目やバイアスを抑えた参加候補者リクルートの方法等を検討し、来年度に実施する調査の準備を整えた。

d. 薬物使用経験をもち、現在は薬物使用者やHIV陽性者への支援を行っている10名を対象に、半構造化面接調査を行い、薬物使用を開始する状況、それに関連する背景要因等の実態を探り、必要とされる対応を検討した。面接調査は次年度も継続される。

e. 依存症クリニックの通院患者を対象に、診療録の閲覧と面接により、薬物使用経験、精神症状と治療、感染症罹患の有無等を調査する。本年は後ろ向きに診療録に記載された関連事項を整理したが、これは来年度実施する研究を準備するためのパイロットスタディにとどまるので、本年は報告を控える。

f. 陽性者支援を実施している東京都と大阪府

のNGO各1団体において、相談等の支援担当者（4名と3名）に対して、半構造化グループインタビューを行った。調査項目は、クライアントの間で薬物使用の問題が顕在化してきた経緯、および現在直面している問題と必要とされる対応とした。同様の調査を来年度は、薬物使用者を支援するNGO職員および刑務所等の担当官に対して実施する予定である。

（倫理面への配慮）

質問紙調査と面接調査の参加者には、研究趣旨を説明し同意を得た。質問紙は回答返送をもって同意と見なした。プライバシーに配慮し、質問紙は無記名とした。リスクに関しては、とくに薬物使用経験者の面接調査へのリクルートに際して、面接が引き金とならないよう配慮した。

研究計画は、特定非営利活動法人ふれいす東京等、研究者の所属機関の倫理委員会で審査され、承認を受けた。陽性者への質問紙調査（c）については、配布する拠点病院の倫理委員会にも審査と承認を依頼している。

C 研究結果

分担研究のいずれもまだ完結してはいるが、調査とデータ分析とが一定に進捗している4つの研究について、中間報告を示す。

a. エイズ診療拠点病院の医療者に対する質問紙調査によれば、（1）陽性者から精神保健の相談を受けた経験をもつ看護師・医師は63.8%、ソーシャルワーカー・臨床心理士は73.9%おり、薬物使用／依存の課題をもつ患者からの相談は、それぞれ38.3%、43.5%が経験していた。患者の薬物使用／依存がわかった経験は、看護師・医師の54.2%、ソーシャルワーカー・臨床心理士の44.7%がもっていた。これらに地域の差は見られなかった。（2）しかしほとん

どの医療者が、薬物使用／依存の相談を困難と考えており、その理由として、薬物使用に関する知識の不足、どこまで関わるべきかという迷いが挙げられた。また陽性者の精神保健の課題に「十分対応できる」「まあ対応できる」と答えたのは36.3%、「ほとんど対応できない」「対応できない」は20.9%であったが、薬物使用／依存の課題では7.8%と41.1%であった。この自己効力感と支援経験との間には有意な相関が見られた。

b. 相談機関の担当者に対する質問紙調査によれば、(1) 陽性者あるいはその周囲の人たちから相談を受けた経験は29.1%だが、東京都は34.8%に対し大阪府は11.5%と大きな差が見られた。業務別では、職業安定所、福祉事務所に、内容としては就労と障害について、多くの相談が寄せられていた。(2) 陽性者が抱える問題については、「十分に対応できる」「まあ対応できるが」が26.5%で、「ほとんど対応できない」「全く対応できない」は23.1%であった。薬物使用／依存の人が抱える問題については22.9%と27.7%と、より低い自己効力感が示された。

d. 薬物使用経験をもつHIV陽性者への面接調査においては、(1) 陽性者ないし性的少数者である薬物使用者の互助グループが形成される契機は、男性の多数派とは異なり、薬物使用が同性間の性関係に伴うこと、自分たちへの偏見や排除を経験することにより、これらが自分たちだけの閉じられたミーティングの形成を促す過程が見られた。(2) 男性同性愛者／MSMにおける薬物使用と感染の関係として、薬物使用による性関係における感染予防の低下が認められた。また出会いの場（ハッテン場、ネット上のサイト）がセックスドラッグ入手の場でもあること、偏見と排除による孤立感がセックスや薬物への依存の一因になっていることがわかった。

f. 陽性者支援NGOの相談等の業務担当者への面接調査からは、(1) 薬物使用に関してクライアントから相談が寄せられ、ミーティング等でも話題にされるようになったのは、2005年、それまではセックスドラッグと見られていた5-Meo-DIPT（ゴメオ）が麻薬指定された頃であることが確かめられた。同じ頃薬物使用者支援NGOにおいては、陽性者のクライアントへの対応が求められるようになり、両方のNGOの間でHIVと薬物使用に関する情報の共有が始められた。(2) NGOが直面している課題としては、薬物使用と依存症治療に関する情報を収集し、クライアントに提供すること、薬物使用者支援NGO、医療機関、行政と情報を共有し、クライアント支援の連携をはかることが挙げられた。

D 考察

エイズ診療拠点病院の医療者のおよそ半数が、患者のなかに薬物使用の経験者がいることに気づいており、4割が薬物使用に関わる相談を受けている。これは、薬物使用／依存が、エイズ診療において見過ごせない問題と認識され始めていることを示している。しかしほとんどの医療者が、薬物に関わる相談への対応に困難を覚えており、他の精神保健の課題に比べて、自己効力感も低い (a)。薬物使用／依存は健康問題であり、したがって医療者にはなによりも、求められる医療とそれに関する情報を提供することが望まれる。そのためには、院内の精神科との連携をはかることと、依存回復を支える院外の医療機関やNGOの情報を整えることが必要となるだろう。後者は、地域の各種相談機関にも、そしてNGOにも求められていることである (b、f)。

いま一つには、医療提供や相談の要請に適切に応えるには、薬物使用という問題が、わけでもHIVとの関係が、どのような現状にあるのか

を知っておくことが求められる。男性同性愛者／MSMは、また陽性者も、それゆえの偏見と排除という、薬物使用を含むメンタルな問題の契機となりうる経験をもっている。また男性同性愛者／MSMにとっては、薬物使用と性的関係とが重なり合っていることが認められる (d、f)。これは、両者が重複することのない異性愛男性とは異なることである。そして、薬物使用をHIV感染と結びつけているのは、静脈注射による薬物使用ではなく、性関係における薬物使用によって予防が疎かにされることであるように思われる。これは、ヘロインの静脈注射がなによりも問題とされる諸外国とは異なることである。

HIV感染症医療の初期には、疾病の重さゆえに、陽性者のメンタルヘルスが重視され、心理カウンセリングが導入された。我が国の保健政策において初めての対応とすることができる。1990年代後半にARVが普及して慢性疾患という側面が強調されるにしたがい、メンタルな側面は以前ほど注目されなくなったようにも思われる。しかし療養のストレスに加えて、私たちの社会には偏見と排除が、HIV感染症に関しても同性愛に対しても根強く存在しているゆえに、就業等社会生活上の困難も少なくない (b、またcの先行研究を参照)。陽性者のメンタルヘルスが、そして社会環境が、重要な課題であることに変わりはない。薬物使用／依存は、メンタルヘルスの課題の一つである。薬物使用に健康問題として取り組むことは、陽性者支援にとって、さらにはHIV対策ならびに薬物対策にとっても、不可欠な課題である。

E 健康危険情報

なし

F 研究発表

研究代表者：樽井正義

(文献)

1. 樽井正義：社会科学研究の倫理，慶應義塾大学社会学研究科，1-17，2013.
2. 樽井正義：なんで同意，生命倫理セミナー3，慶應義塾大学医学部，117-128，2013.
3. 樽井正義：研究における倫理的配慮，井上洋士編，ヘルスリサーチの方法論，放送大学教育振興会，228-245，2012.
4. 樽井正義：人の夢、社会の夢，夢を考える，慶應義塾大学文学部，109-125，2012.
5. 樽井正義，石田京子：法と政治の原理，牧野英二他編，カントを学ぶ人のために，世界思想社，325-340，2012.
6. 樽井正義：人間の尊厳，笠原忠他編，ヒューマニズム薬学入門，培風館，3-12，2012.

研究分担者：生島嗣

(文献)

1. 大槻知子，生島嗣，佐藤幹也：すべての人にとってより働きやすい環境づくり—NPOと障害者職業センターと企業の協働によるHIV研修の実践報告—，日本エイズ学会誌，VOL.14，NO.3：163-167，2012.

(口頭発表・国内)

1. 生島嗣，沢田貴志，岩木エリーザ，青木理恵子，山本裕子，佐藤郁夫，牧原信也，池上千寿子：「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業」から見える地域ニーズに関する考察，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川.
2. 生島嗣，荒木順子，岩橋恒太，柴田恵，佐久間久弘，大島岳，木南拓也，高野操，塩野徳史，市川誠一：HIV検査提供機関、NPO、研究機関による地域連携会議の効果に関する考察，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川.
3. 山本行宏，佐藤郁夫，高木伸浩，生島嗣：ぷ

れいす東京 ゲイ向けHIV/エイズ電話相談におけるHIV/エイズ以外の相談（セクシュアリティ・メンタルヘルス等）内容の傾向，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

4. 柴田恵，岩橋恒太，生島嗣，荒木順子，高野操，市川誠一：首都圏居住MSMを対象としたwebサイト「HIVマップ」における抗体検査への準備性に注目した情報提供手法の開発—エイズ予防のための戦略研究 MSM首都圏グループ，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

5. 大槻知子，柿沼章子，高久陽介，大平勝美，生島嗣，長谷川博史：HIV陽性者のための学術集会参加支援プログラムにおける，陽性者の情報源と関心のありか，支援ニーズについての考察，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

6. 牧原信也，生島嗣，福原寿弥，池上千寿子：パディ派遣サービスの利用者に関する考察，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

7. 大木幸子，生島嗣，井上洋士，工藤恵子：保健所等におけるHIV陽性者への支援の特性と困難要因及びそれらへの支援方策，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

8. 岩橋恒太，荒木順子，生島嗣，塩野徳史，佐久間久弘，高野操，大島岳，木南拓也，星野慎二，柴田恵，桜井啓介，阿部甚兵，市川誠一：首都圏居住のMSMを対象とする検査普及プロジェクト「ヤロー」の構築と検討—「MSM首都圏グループ」の取り組み，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

9. 大木幸子，生島嗣，井上洋士，工藤恵子：HIVに関する相談への抵抗感とHIV陽性者支援・セクシュアルヘルス相談経験との関連，第71回日本公衆衛生学会総会，2012年，山口。

研究分担者：大木幸子

（文献）

1. 大木幸子：エイズ対策における保健師の活動，ふみしめて七十年，日本公衆衛生協会，249-251，2013。

（口頭発表・国内）

1. 大木幸子，生島嗣，井上洋士，工藤恵子：保健所等におけるHIV陽性者への支援の特性と困難要因及びそれらへの支援方策，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

2. 志村友紀，吉岡亜希子，大木幸子：HIV陽性告知から疾病受容に至る心理的過程の変化～MSMである陽性者に視点を当てて～，第26回日本エイズ学会学術集会・総会，2012年，神奈川県。

3. 大木幸子，生島嗣，井上洋士，工藤恵子：HIVに関する相談への抵抗感とHIV陽性者支援・セクシュアルヘルス相談経験との関連，第71回日本公衆衛生学会総会，2012年，山口。

4. 井上洋士，若林チヒロ，戸ヶ里泰典，板垣貴志，細川隆也，大木幸子：HIV陽性者のヘルス・プロモーション支援に向けた当事者参加型調査研究—狙いと実施体制，第71回日本公衆衛生学会総会，2012年，山口。

G 知的財産権の出願・登録状況

なし